

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可(毎月一回一日發行)
昭和二十四年三月二十八日運輸省特別取扱承認第三五二號
昭和二十四年七月廿日印刷 昭和二十四年八月一日發行

第十五卷

第八號

浄土

八月號

人生の深み

吉田絃二郎

花道

佐々木孝丸

心の窓から

村岡花子

蟹さんの亡くなる頃

村田嘉久子

1949

8

悟りの心

森閑とした山中に空をみる。鳥が一羽悠々と飛んでゆく。獵師はこれをとろうと銃をかまえる。詩人はこれを見て詩心を湧き立たせる。動物學者はその鳥が何鳥かをみきわめようとする。一羽の鳥も、これをみる人によつて、獲物にもなれば、詩にも描かれ、學問の材料にもなる。だがしかし、それ丈けだろうか。鳥は依然として悠々と大氣の中に己れのあるがままの姿で浮んでいる。これをみる人々の、限られた小さな思惑などには何等のかかわりもなく。

鳥には鳥のありかたがある。これを、いや詩だの歌だの藝術だのと、自分自分の立場で、自分流にしか捕え得ぬのが人間である。常のわれわれの生活は、すべてこの狭い我見から出發している。だから、衝突が起り憎しみが湧く。このような、心の座敷にはめられた戸、障子を取り拂つて青疊の上にのびのびと五尺の體を思い切りのばせば、宇宙萬物森羅萬象、一つとしてこの心の座敷に入らざるものはない。飛んでいる鳥も、飛んでいるままにその心に入つて来る。これが悟りの心境である。(竹中信常)

目次

花

道

佐々木孝丸(22)

雨・夏(詩)

鳥居良禪(7)

一文不知

吉原元明(9)

お寺まいり

小金井喜美子(24)

心の窓から

村岡花子(4)

人生の深み

吉田絃二郎(1)

蟹さんの亡くなる頃

村田嘉久子(5)

蟹さんの辭世

佐藤賢順(5)

偶然に讀く

寺尾讓(20)

淡き影(歌)

ふじた・ひろし(19)

爽やかな夏の身だしなみ

早見君子(28)

海旭先生の死

眞野正順(10)

會友の聲・芝園だより

(25)



人生の深み

吉田 絃二郎

(1)

自分の肉親の者を病院に送つて、病院で死なせた経験を持つ人たちの中には病院に對して割り切れぬ感じを抱いてゐる人もあるであらう。わたくしは或る大學の附屬病院でそれを経験した。そこにもまことに親切な醫師もあり、今日なほ思ひ出しては感謝してゐるほどである。

ところで、いけないのは院長の廻診にぞろぞろとついて来る醫學生の態度である。診ていたゞく方では、死ぬるか生きるかの大問題であるのに、隨行の學生の中にはあくびをしてゐる者があつた。家族の身になればたまらない。

病人はつひに死んだ。

わたくしはたゞ一人病室に残つて蒼白い病人の額を見つめてゐた。

窓の外には梅雨時雨が降つてゐた。

靈柩車が來たので遺骸は病室から運び出されたが、こゝでもわたくしの心を暗くするものがあつた。

わたくしは柩は當然入院の際と同じやうに玄關から送り出されるものだと思つてゐた。ところが柩は亂雑に下駄や靴を抜き捨てた狭い出入口から、捨てるやうにして送り出された。

肉親の者にとりては死者の亡き骸は生き身の人間以上に尊いものである。昨日までは俗人間であり、穢毒の身であつたものも、今日は佛となり、神になつたのである。

肉親の者にとりては、かれ等が生きてゐた日よりさらに貴く、さらにいぢらしく、さらに親しいものである。

る。

かう考へて來ると、死者の亡き骸を不淨門のやうな出入口から運び出すといふことは洵に人情を解せぬやりかたである。瀕死の患者の前であくびをする醫學生といひこの附屬病院はわたくしに暗い印象を刻みつけた。

今から百餘年前のことである印度にコビールといふ詩人があつた。かれは賤しい鑄掛け屋をいとなみつゝ聖人の生活を送つた。そしてかれが死んだ時かれを葬つた翌日、人々のかれの墓に馥郁として美しい花が墓の土から咲きかをつてゐるのを見た。コビールは、死によつてさらに美しいかれ自身を現じた。近代の科學いつぺんの人たちは、この道理を忘れてゐる。

かれ等は人間を見る。しかしそれ以上の佛性や神性を見ることを知らない。かれ等は病める人間を正玄關から迎え入れ神や佛を不淨口から捨てる。

要するにこのやうな病院のやり方や醫學生の存在は、敬虔な宗教心の缺如から來てゐる。

すべての病院に宗教的であれと望むことはできないかも知れないが、宗教的なものが欲しい。

わたくしは五十年前に、熊本の五高に近くに外國婦人によつて營まれてゐる癩病院を見て、子供心にも頭の下る思ひをしたことがあつた。富士の裾野にも同じ種類の病院があり、いづれも篤信の人たちによつて經營されて

ゐることは誰れも知るところである。

もし日本のすべての病院がいさゝかでも宗教的なものの上に經營されるやうになつたら、どんなにか病める人たちにとつてよろこびであるか知れない。と、同時にそれは病院内の醫師やそこに働いてゐる人たちを救ふことにもなる。

このごろわたくしは久しい間篋底に埋めて置いた「江漢西遊日記」を取り出して讀んだ。畫人にしてオランダ研究者たる司馬江漢が天明八年四月江戸を立つて長崎に向ひ、翌寛政元年三月ふたゝび江戸に歸りつくまでの旅日記である。

「四月二十三日、晝過、江戸芝神遷（新錢）座を出立して金川（神奈川）に至る、吾此度の旅行はじめてなり。是より肥州長崎の方其外諸國を巡覽して三年を経されば歸るまじと思ひ立し（故）にや又は宿に妻子を置たる故にや胸塞（むねふさがり）氣分あしく云々」

出立の日の江漢の偽らぬ人情味を描き出し、きはめて殊勝である。

この宗教を持たぬ近世の科學者の日記を讀んでゐる間に、わたくしは佛頂禪師の弟子であつた芭蕉の日記を思ひ出さずにはをれなかつた。

こゝでちよつと芭蕉翁の「おくのほそ道」の冒頭の一旬を引く

「むつまじきかぎりは宵よりつどひて舟にのりて送る。

千じゆ（佳）と云處にて舟をあがれば前途三千里の思ひ胸にふさがりて幻のちまたに離別の涙をそぐ云と一

江漢は妻子を江戸に残して旅立つために胸塞がるといひ、妻子なき芭蕉は前途三千里の思ひ胸にふさがるといふ。いづれも江戸を立つ刹那にきはめて嚴肅なスタートを切つてゐる。

ところで道々町々をたどつて行く先々での旅の味ひ方には頗るちがつたものがある。

芭蕉は矢立、紙、雨具などの他には物を携へてゐないが、江漢は油繪の具の他、オランダの器物、兩國橋ののぞき眼鏡までもたづさへてゐる。そして機會ある毎に油繪を見せ、からくり眼鏡を見せて地方の人たちをおどろかしてゐる。

芭蕉を宗教に生きた旅人とすれば江漢は科學にのみ生きた旅人である。そしてこの二人の旅人が旅に見出した人生の姿は何うであつたらうか。もともと芭蕉と江漢を同じレベルに置いて比較するには江漢は輕過ぎるが、ともかく二人の旅人としてその旅の味ひ方をくらべることはできる。

芭蕉は曾良といふ弟子をつれて出發した。曾良は芭蕉のお伴をするためにわざ／＼髪を斷ち僧形になつて芭蕉に従ひ、病弱の師を介けておくのほそ道の旅の大部分を

形影相伴ふて歩いた。しかしつひに曾良は中途にして病み師から別れて行かなければならなかつた時芭蕉は「行ものゝ悲しび、残るものゝうらみ雙鳧のわかれて雲にまよふがごとし」と別離の悲しみを叙してゐる。

江漢にも江戸出立のをり一人の從漢があつた。しかもこの從漢はわづかに駿府まで伴したばかりで江漢を裏切つた。江漢は「江戸ヨリ從者に連レ來りし松浦の者不埒の事あり、故に茲にて暇遣す」と記してゐる。

芭蕉は貧しい俳行脚をつゞけたが、心の世界に於いては最もめぐまれてゐた。

江漢もをりをりはすゐぶんひどい宿に泊り合はせて終夜蚤に食はれて眠れなかつたやうなこともあつた。しかしかれは行く先き先きにかれを待つてゐる大名や富商を持つてゐた。

中國のさる城下に滞在したをりの日記を見ると、土地の大名からどれくらゐの取り扱ひを受けたかといふことが想像される。

「上役（大名の）吾前に來りて口上を聞。夫より坐しきへ通し二十五菜の膳を出し、夫より上より被下しとて白銀三枚外に金三百疋也。……家老用人よりも各々挨拶ありて云々……亦々酒肴出し馳走する、さて此地へ來ると馳走役人付添ひ三度の食に魚肉多し、甚々困入る」金を貰ひ、馳走攻めの旅の得意さもしのばれる。

これを芭蕉の樹下石上を宿としたる漂泊の旅とくらべて見るがいゝ。

芭蕉の宿の主は大名でもなく豪商でもなく、市井人であり、野人であつた。日光の山中でたま／＼かれに一夜の宿りをゆるしたのは貧しい佛五左衛門であつた。しかもかれはこの貧しい野人の裡に佛の姿を見出したのであつた。かれは五左衛門を評して、

「いかなる佛の濁世塵土に示現して斯る桑門の乞食順禮如きの人をたすけ給ふにや云々」と言つてゐる。

また仙台に入つては畫工加衛門といふ男に紺の染緒付けたる草鞋二足をはなむけされてひどくよろこび

あやめ草足に結ばれわらぢの緒

の一句をのこしてゐる。

芭蕉は旅先で三兩の金をはなむけにせんといふ人があつた時、固辭して一文の錢も受けなかつた。

江漢の西遊記にはほとんど到處に女のことを書いてゐる。みな藝妓であり、遊女である。

大阪に滞在したをりのことである。かれは村といふ白人(遊女)と親しくなつた。道頓堀の竹庄といふ家に村といつしよに泊つた夜のことを記して一村は大阪の者にて親兄弟なし、年々明け前にて三十兩出し被下候得ば、年もすみ江戸なりとも長崎へなり共、つれていて下タされと云そおかし」と言つてゐる。

江漢が旅の先き先きで見た女は十五六の女であり、金錢で賣買される女であつて、それ以上何ものでもなかつた。だから村といふ大阪の女にしても衷情を訴へたのであらうが、江漢にとりては「おかしい」こと以上の何ものでもなかつた。

芭蕉には市振の關に於ける二人づれの遊女の話がたゞ一つある。越後の新潟の遊女で伊勢まで行くのだが、女ばかりの道中の心細さに、芭蕉に道づれになつてもらひたいとねがふのである。

「ゆくへしらぬ旅路のうさ餘り覺束なう悲しく侍れば見えかくれにも御跡をしたひ侍ん。衣のうへの御情に大慈のめぐみをたれて結縁せさせ結へと涙を落す。不便のことには侍れどわれ／＼は處々にてとゞまる方おほし。只人のゆくにまかせてゆくべし。神明の加護必つゝがなかゝるべしと云捨て出つゝ、哀さしばらくやまざりけらし。」

一家に遊女もねたり萩と月

芭蕉は遊女の乞をことほり、云ひ捨てゝ出立はしたもののゝ、あはれさしばらくはやまざりしと心の裡を語つてゐる。芭蕉の見た遊女は御佛の大慈大悲に結縁せらるべき佛の子でありながら宿命の下になやめる同勞同苦の同行であつた。芭蕉のこの尊い人生の見方、感じ方はかれの佛門の修道に負ふところはなはだ多しと見なければならぬ。



蟹さんの亡くなる頃

村田 嘉久子

兄が亡くなつてから今年で丁度十四年になりますが、偶然にも其兄の舞台を非常に好きで隠れて聲援して居て下すつたといふお人に、先日或る家でお目にかゝりました。

「貴女とは初の對面ですが、私は蟹十郎さんの舞台が非常に好きで大概一ト芝居三回四回と見物したものです」

と其お方は仰しやいました。

名優の舞台なら兎も角、いくら舞台に熱心だつたからと言つて、端役をいつも演つて居た兄の舞台を三度も四度も観て下すつたと言ふのを聞いて、私は御禮の言葉とか感謝の言葉とかはかへつて出ず、只々深く頭を下げた事でした。又其お方は故兄の舞台があんまり好きなので、一度平常の兄に逢ひたく、いろ／＼と手を廻して御招待下すつたさうでしたが、大體兄は若旦那氣質の、家では我儘一杯のやんちゃでしたが、他には非常にはにかみやでなか／＼人様のお招きなどにすぐ軽く出懸けて行けない性分でしたから、度々お断りしたと見へ、其お方もいろ／＼考へた末ある新橋の藝妓さんで年を取つた人で、よく兄を知つて居る人が居て、其人にたのんでやつて来て貰つて一緒に食事をしながら、いろ／＼と舞台の話など聞いて非常に愉快で嬉しかった、としみ／＼其時私に仰しやいました、私は其晩床に入つてから、久しく特別には思ひ出しもしなかつた故兄の病中の事などが、次からつぎへと考へ出されて來たのです。

蟹さんの辭世

村田嘉久子さんから結構な隨筆を寄せられた。その中に私の名も出てくるので、その頃を思い出しながら、少し書き足させていただく。蟹さんはその時、上野の不忍の池の近くに住んでいた。私が行つたときは、もうかなり病勢が進んでいて、差し迫つた容態だつた。

床の間には私の寺の數代前の和尚が書いた「南無阿彌陀佛」の一軸が掛けてあつた。蟹さんはあごでそのお名號を指して、

「うちじや死ぬときは、皆この掛字の前で死ぬんだ」

と言つた。とその次には、看護の人に床の間に立てかけてある短冊を取り寄せさせて、

「どうです？ これはあつしの辭世です」

見ると俳句が一つ書いてあつて、蟹の繪のサインがしてある。

蟹一つ蓮の葉にゐる夏の池

度々やつた胃潰瘍が悪化して三四ヶ月の病床中母を寸時も傍を離さず全て赤坊のやうに「お母さんア〜」とだだをこねて居たのがはつきり思ひ出されます。

私でさへ、三月も四月も母を引つけばなしで、我儘を言ふやうな機會はありませんでしたのに、兄は（又母が一番可愛がつたからでもありません）看護婦が居ても、嫂が居ても、朝から晩まで「お母さんア〜」と言ひつゞけでした。

苦しくなると母が胸を押さへてやつて「お念佛を唱へるんだよ、さうすると少し楽になるよ」とこれまた子供をあやすやうに、五十五歳の兄に言ひ聞かせるのです。すると、時々發作が起つて來て、吐いたり苦しんだりすると母の唱へる稱名に合せて「なむあみだぶ〜」と全て頼まれでもしたやうな空々しい聲をして言ふので、傍に居る看護婦も嫂もあり其様子が空々しくつておかしいので——いくら病人とは云へ、長い事でしたからいらか氣の樂な處もあつたのでせう——始めの内は吹出してしまひました。私なども時々見舞ひに行つて、それを聞いて矢張り吹出した組でした。

兄は、兩親が信心深いにもかゝらず、不信心と言ふ程ではありませんでしたが、あまり平常佛の事を氣にかけたり御念佛を唱へたりはしませんでしたし、母などのそれを熱心すぎると言つて笑つてさへ居た人ですから、病床で母の唱へる御念佛に和すると言ふ事がすでに不自然な處へ其突拍子もない聲を出して唄みたいに「なむあみだぶ〜」と言ふのでおかしくつて皆が笑つたのでした。處が、一日經ち二日經ち年月も經つて行く内に嫂も看護婦も誰れも笑はなくなりました。

油汗を掻いて苦しむ兄を、一生懸命御念佛を唱へながらさすつて居る母の姿、それと同じに兄の口からもれる御稱名の聲が前とは全て違つて來たのです。うめくやうな苦みの底から唱へる「なむあみだぶ」は悲愴なものでした。眞青になつて唱へて居る眞劍の様

蟹さんはこの即妙が得意で、大いに辯じ立てた。

お母さんの話によると數日前、師匠の六代目が見舞にきて、蟹さんと珍問答を交したそうである。

「蟹さん、お前さん、死んだつて化けて出ちやいやだよ。出るなら夜でなく晝間出ておくれ」

「化けやしませんよ、あつしや極樂へ芝居をしに行くんで、死ぬんぢやない。葬式はやめて送別會にしてくださいよ」

×

私はその日の話を、當時二萬の發行部數をもつて全國の信仰を求める人々に愛讀されていた「浄土」の特輯號、「念佛讀本」に書いて廣く一般に感動を與えた。

もし現代往生人傳が編纂されるとすれば、蟹さんの如きは、いち早くそのうちに輯録されるべきである。

子は、嫂も看護婦も、居合せた私なども思はず一緒に「なむあみだぶつ〜」と唱へた程でした。

傍に居る者が皆いつとはなしに、兄が苦しみはじめると極つて御念佛を唱へるやうになりました。すると、兄の苦しみはいくらか樂になるやうな様子で、自分も唱へて居る爲めに苦しみが少し忘れられるらしく、それからと言ふものは、朝から晩まで御念佛を唱へ通してでした。母は三月の間といふもの、食事も兄の枕元で、それこそはぐかりに立つ時間も惜しいやうな工合で、母が一寸立たうとすると、

「お母さんア、どこへ行く。傍に居てくれよう」

と子供のやうにせがむのです。死期が近付いて居た故もあるのでせうが、私は母の體をとでも心配しました。然し母はあきらめも人一倍よく、これが最後だから出来るだけの事をしてやりたい、傍に居てやりたいと、實に他の人が驚く程夜も眠らず看病をしてやつて居ました。

御念佛が、實に堂に入つて來たと思つた兄は、或る日半紙と筆を貸してくれ、と少し苦しみの少ない時に言ひ出しましたので、そつと手に持たせてやると、たど〜しい字で自身の改名を、たんねんに書きつけて居るのです。

善勝院常譽實榮居士——善次郎といふ本名の善を取つて、父の勝助と母の常と、實道といふ祖父の改名からと嫂の名榮子とを組合せたものを書いて、

「嘉久、これいゝ改名だらう。早速願行寺さんへお願いしてくれよ」と言ひました。

兄が平常、よくサインの代りに書く一ト筆書きの蟹が一匹、改名のそばへ墨畫で書いてありましたが、よほど気分がよい日だったのでせう。それを書いてしまふと兄は實に樂々とお念佛を唱へて

「これでいゝや、お母さんに別れて行くのは淋しいけれど、極樂にやお父さんが待つて居てくれるんだから、ちつとも淋しくないや」

雨

鳥居良禪

夏になると

山寺は薄荷草の匂がした

拂 曉

殷殷として寒蟬が鳴きわたると

時雨が沛然と山嶺を洗つた

夏

石の上に

月見草の花が咲いた

眞夏の寺は灌木と蟬の聲にかこまれ

森閑としている

この谷間の青葉の底を急流が走り

岩と蟹を洗つた

と笑ひながら言ひました。其時の顔は實に無心なものでした。すると母が傍から、

「自惚れでないよ、お前極樂へ行けるつもりかい」

江戸ッ子の母は投げつけるやうに言つたので、皆思はず大笑ひして仕舞ひました。

今いつ死ぬか解らない病人を、傍においての其空氣は、もし知らない人が見たら不思議な位ひ和やかなものでした。

發病當時いつも「己れは今死にたくないな。もう少し生きて居たいな」としきりに言ひつけて居た兄とは全で人が違つたやうで、父の居るあの世へ行くのが何か楽しいみたいで、弟妹も澤山あり母の心配はないと思ふのか、嫂の事をしきりに頼んだ他は、何一つ心にかゝる事はないらしいのでした。

是非來て頂いてほしいといふ事で、品川願行寺の御住職佐藤賢順先生に來て頂いた頃には、御住職がびつくりする位ひ、ほがらかに改名の講釋をトくさりやつて、御住職を面喰はせた程でした。

「お念佛ぎらいだつたお前が、改名まで自分でつけて、後々の事まで御住職に講釋したんぢや、お寺さんはする事がないぢやないか」と母は傍で笑ひながら言ひましたが、それが最後でした。

良い意味の道樂者だつた兄、藝熱心だつた兄、はにかみやだつた兄、母を丸めてはお小遣ひを持つて行つた兄、其のため權太、とあだ名さへあつた兄、然し若旦那の氣質は生涯忘れず、誰れにも大らかだつた兄、その兄は殘暑のきびしい九月七日に、靜かに／＼お念佛を唱へながら、良い顔付きをして息を引取りました。嫌な戦争も知らず、まして焼出されも後の苦しみも知らず、安らかに父の傍へ行つた兄は全く幸福者でした。

十四年経つた今日、偶然にもお目にかゝつた兄の後援者からいろ／＼お話を聞いて、今更のやうに兄の生前を偲びました。今頃はあの世で、後から逝つた母と親子三人で楽しい話を仕合つて居る事と思ひます。

おがむ

白金隆司

みほとけに、せめて一輪の花をと思つて、少女は戸外へ出る。夕べの野末には涼しい風が吹き渡る。西の空にたゞよう餘光の雲の下で、そここことたづねもとめる。

やがて畠道の一隅に、桔梗の花をみいだす。少女はそれに手をのばして摘みとろうとする。花は可憐な姿を夕べの風にわずかにふるわせて、こよなく美わしくたおやかにうなだれる。少女の心には、その餘りにも可憐にして美しい花への、そしてそれを生み出した自然への、限らない愛慕と尊敬が迸りあふれる。

さうだ。摘まなくてもよい。みほとけはここにもおいでになる。少女はしづかに合掌し深々と禮拜する。

或日、傷いた青年が或お寺の和尚の所にお話を聞きにきた。此の人がなかなかの理窟屋で容易に佛の心に向く様でない。見てとつた和尚は青年に向い大喝一聲、佛の聲を聞いて来いと云はれたが、なか／＼理窟を止めない。此の日も顔が赤くなるほど怒つてこんな事なら歸ると云つて出てしまつた。けれど遂に此青年も救はれる時がきた。

其後、彼は殊勝な面持で和尚を訪ねてきて云つた。あの晩、私は床に入たが腹が立つてどうしても眠むられない。幾度かねがへりしていると

母親が心配して、寒むかろうからもう一枚布団をかけて上げようと云つてかけてくださつた。私は其時始めて母親の慈愛がしみじみと感じられました。今迄は幾度か、こんな言葉は聞いた

一文不知の身

吉 原 元 明

り頭を撫でて可愛いがられたり膝の上にだかれたりしましたが、昨日迄は本當の親の慈愛と云ふものを知らずに過してきました。親の愛すら今日迄見失ふてをりますから、佛の慈愛と云ふ大きな深い精神は、理窟ばい私には分るはずがないと云ふ事を始めて氣附かせていただきました。と涙を流して話をしたと云ふ。佛の心にふれるのは一の機縁であります。此青年は和尚の親切にもれる大喝一聲の

味の微妙を知らず、怒りの煩惱を燃上らした爲めに母親の心情を一層深く味ふて、佛の心にふれたのであります。和尚の善的方便の親切の聲に由て佛の心を味ふ縁が熟しきたと云へます。

縁は天地至る所にあります。機が熟せないと容易につかむ事が出来ません。宗教は理窟ばい態度では受容できません。すなほな氣持ちが大事であります。

博多萬行寺の七里和上と云ふ方は稀れた高僧でありました。日夜

布教の爲めに盡くされた方でありました。此の和上についてこんな話があります。いくら

茶や湯を注がれても茶碗をふせてをいては湯が入らぬ。湯や茶を望めば茶碗を仰向にして受けねばならぬ。何度

御話しを聞かんとしと常とに申されたと云ふ事であります。まことに尊い味のある御話である。

も心の茶碗をふせたままでは法水は入らないと常に申されたと云ふ事であります。まことに尊い味のある御話である。

論語讀みの論語知らずと申しますが、佛法を聞いたたり佛書を披讀するには己れを空ふして正しい批判の上に立つて味讀する事が大切であります。天地自然人事一切に對し此呼吸を吞みこむ事が正しい、いきかたであります。

理窟ばい人は能く佛法は偶像崇拜と云て見下げています。今假りに偶像崇拜でも、其結

果自分の信仰の増上の御縁になれば其人にとつては單なる偶像ではありません。ましてや古德聖賢の道の方々が一刀三禮の誠を運び心血を注いで佛の勝德を表象された光顔巍巍たる尊客を拜する時、其人にとつてはどうして單に偶像崇拜でありませう。

凡て物の出来上ぐる事は容易ではありません。苦修鍊行の佛の微妙の御相好は拜むものにとつては、心の生ける佛であります。求道の人にとつては、心の親様であります。自分を底から揺がす様な不幸に出逢ふたものにとつては、佛様は心の親様であつて、私の目前に立ち玉ふ慈愛の深い方であります。

宗教を求めんとするものは、第一己れを空ふして宗教の何たるかを忠實に味ふ事が大切であります。殊に青年の心理は世界をのむ様な氣概があり、高い熱情があり、元氣があります。どうかしますと細心と着實を缺く場合もあります。宗教に對しましては、色々の宗教がありますから、批判なしにどれでもこれでも丸呑みはいけません。先づ第一に己れを空ふして佛法の何たるかを正しく見ないととんでもない好機をとりがします。

法然様は一代藏經を五度御覽になり、智慧第一の法然様と當時の佛教界の人々から稱讃を受け玉ふたが、常に一文不知の身として御念佛生活を遊ばされました。慈愛深くまします佛様へは人間は立ちうち出来ず、人間を見限つて佛様へ直願された御體驗の上の一枚起誓文の御言葉であります。

海旭先生の死

眞野正順

きのう午後、芝中學校から使が來て、渡邊先生の追憶會をしたいから、額をかしてくれと云ふので、座敷の鴨居から先生の——すこし肩をそびやかした「常樂」の文字をはづして渡した。

思へば、先生の逝去も、すでに十七年の昔となつた。まだ、どこかに不意にも影が動いて、先生のあの滋味のある聲が聽えて來そうな氣がするのだけれど、やはり歲月の流れは争はれず、私も老いて頭髮はすつかり白くなつてゐる。

○
昭和八年正月は歳が明けても、きびしい寒さであつた。舊臘から少しぐわいが悪く、先生は芝中の元旦の式に出たきり、そのまゝ深川に引籠つていられるといふ噂をき

いたが、別段ふかく氣にとめていなかつた。私自身、いつも冬となれば半病人となる慣はしで、また、搔卷の襟の下から來客に應對する身の上となつていたからである。

しかし、正月も半ばをすぎ、やがて終りに近くなつても、先生は起き上らず、かへつてだんぐ／＼悪くなつてゆくといふ噂がしきりに耳に入つてきた。

「醫者は何といふのだ」

「風邪がこじれて、内臓のあちこちに故障を起しているらしいのだが、それより困つた事には、先生あの氣質だらう。てんで醫者のいふことを聽かんのだ。だから、いよく／＼悪くなるばかりだ。」

きいてゐる内に私は何か憤りに似た感じが胸元にこみ

あげて來た。

いくら氣質だと云つたつて、かういふ時はこまる。このまゝに取り返しがつかぬ様になつたらどうするのだ。

いまの先生は日本の佛教界にとつて、かけがへのない非常に大切な方ぢやないか。自分で自分ぢやないのだ、これを考へて下さらんきあ困る。病氣になれば醫者の云ふ事をきくのは當然だ。いくら氣質だつて、小供ぢやあるまいし、少しは考へてくれなくては困る。

何か、むしやくしやと、急に追はれるやうな氣持になつてきた。

翌朝、早々床からとび起きて、私は寒雀のやうに厚く着膨れて深川西光寺の門をくゞつた。

○

先生の書齋は、書院を横切つてむこう庭にさし出た別棟の二間つゞきであつた。靜かに唐紙をあけると、壁を背にして二人の婦人がならんで座つておられ、私を見ると鄭寧に禮をされた。令妹の大島赤尾の兩夫人である。

先生は……と見ると薄日のさした南縁を頭にして、すこしあをぬけに、片腕を枕の上に大きく曲げて、口を結んで天井をにらんでおられた。その様子が、なにか、無

理に寝かされた大きな腕白小僧のやうで、すこし可笑しかつた。

でも、思つたより寢れて見えないのには安心した。

私は側によつて云つた。

「先生。醫者の云ふ事をきかなくては困りますね。病氣になつたら……」

先生は、突然ぎらりと大きく眼をみひらいて、まつすぐ、私の顔を見つめた。そして、あの吃るやうな癖で唇を動かしたかと思ふと、いきなり、思ひもかけぬ大きな聲で云はれた。

「僧は死を怖れてはならないのだ」

「……」

私は、虚をつかれたやうに口噤つた。

思ひもかけず、横なぐりに、太い一線が私の上に、さつと眞一文字に引きおろされたのである。

死！ それをいま云つていゝのではない。このまゝ重くなられては……といろ／＼の言葉が、せはしく私にはせめぐるのだが、何かしら強く、氣押されたやうに、そのまゝ暫く言葉が出なくなつた。

しばらくして、私は病室を辭した。

○

隅田川から入り込む堀割にかけた橋の上には朝日がさし、うす紅く水蒸氣があがつている。

私はまた立ちどまつた。

橋の欄干から見おろすと、黝すんだ冬の水の上にいくつかの荷船がならび苦に白く霜をおいてゐる。

「僧は、死を怖れないのだ」

思いもかけぬ衝撃がまだ私にある。

——やはり私自身死をおそれてゐるのではないか。かうして先生が醫者の云ふ事をきくのきかぬのと苛だつてあたふた苦情を云ひに来る自分も、實はどこか死の恐怖にかられてゐるのではないか。病となれば、手當々々と騒ぎたて、その一通り二通りが整えば、それで、まづ萬事は済んだやうに思ふ。しかし、そういふ小事にかゝわりなく「死」はその冷嚴なる巨歩を以て一步々々ゆつくり近づいたり、また立止つたりしてゐるのだ。病にあがつて「僧」のまづ、しつかりと目を注いでおらねばならぬ所はこゝだ。この嚴肅なる人生の大事の到來に従容と心の用意を整へてゐること、それがわれらの道ではないか。

欄に掌をのせたまま、私はぼんやりと水を見つめていた。

日を越えて、翌々二十七日早朝、私の家の電話の鈴は鳴りひびいた。それは、先生の訃を傳へるものであつた。

○

先生の死と共に、あの有名な遺言狀が發表された。遺言といつても、それは獨逸留學中友人足立文太郎醫博に與へられたものである。

覺 書

一、予が死後の屍體は之を足立文太郎君に贈る。蓋し同寓三載餘、同君が學に力むるの至れるに感ずるあり、予が衷心の尊敬を同君に表するの榮を得むことを欲すればなり。予が親戚及朋友等は一切之に對して抗議するを得ず。

一、予はわが骨骼軟部等の保存に關して毫も希望する所あらず、之を粉碎するも焼棄するも一に同君の意志に任す、屍體取扱の如きも斷じて特別の待遇を要せず、窮民の遺骸刑餘の殘骸と同一の取扱を得ば足れり。

一、官機臟器骨骼等若し世に傳へて後學を裨益するに

足るものあらば、其保存固より之を妨げず、之を外國の標本と交換するが如きも亦不可なし。

一、屍體解剖の主任者若くは局部材料の使用者は足立君が認めて適當となす人は何人にてても同君より其權利を收得すべし。

一、足立君予に先ちて死亡したる時は、同君が朋友若くは門下の中同君の意志によりて此覺書の權利を承繼するを得。此場合には該承繼者は其姓名を予に通知あるを要す。

一、予は予の死屍體の贈致と共に若干の金圓を之に添付せんとす。少くとも、石鹼一箇手巾一枚入浴費及醇良の酒三四合の代金を添付せんことを期す。執刀事に従せし後、入浴一番少く陶然たるの快あらんことを欲すれば也。

明治三十六年十一月三十日

獨國エルサス州ストラスボルグに於て

渡邊海旭 印

○
約のごとく、足立博士は京都から急遽門弟を率いて上京され、二十八日東大病院に於て博士執刀の下に嚴肅に

解剖は實行された。

そしてその結果は、初七日連夜に西光寺において多數の友人門弟を前にして、主治醫H氏から發表せられた。それによると、意外にも、先生の病因は、さきの主治醫の診斷と相違して敗血症であつたのである。一座はたちまち動搖の色を生じた。年若い門弟の一人は泣くやうな聲を振しぼつてH氏を難詰しはじめたが、もとより、今は詮ない事であつた。

たゞ、かういふ事だけは確かにあつた。

あの時、たとひ先生が主治醫の云ふ通り細心翼翼と努められたとしても、死は、やはり先生に訪れて來たのであつた。

先生の覺悟は正しかつたのである。

だ、いふ堅い話がつゞきましたから、「淨土教の本質」は一回休みまして、今月は渡邊先生の追憶をかきました。いづれまた「本質」をつゞけます。(眞野生)

中央公論八月號の創作「約束の身體」——武田泰淳——はまさしくこの同じ海旭先生の遺言狀をめぐる死の問題をテーマとしている。期を同じくして、一は文壇中堅作家よりこの問題が取扱われたことに感なきを得ない(編集部)

つて聲はりあげて歌ふ様子は實にほほえましいものであつた。

さて、以下は私の放送の草稿である。

六月は梅雨時で私たちは餘り晴々とした気分にはなりません。六月は、アメリカの詩人、ジェームス・ラッセル・ロウエル (James Russel Lowell) の詩の中に歌はれてゐる六月は喜びの絶頂とも感じられるほどの明るい季節になつてゐます。うつとうしい日の多い私たちの國の六月なればこそ反對に、思ひつきり明るい、晴れやかな晝と夜を考へることにしたいのです。詩人ローウエルの先祖は千六百年代にイギリスからアメリカへ移つて來た人々です。そしてジェームス・ラッセル・ローウエルが生まれましたのは千八百十九年で、むろん我が國の明治以前ですが、死にましたのは我が明治二十四年、西暦の千八百九十一年でありました。七十一歳まで盛な文學活動をしたのであります。

ローウエルは六月を何と言つてたたへて居りますのでせうか？ その言葉を借りますと、

「今こそ一年中での満潮の時だ—

と言つてゐるのです。更にそれを説明して、

「もしも一年のうちに完全な日といふものがあるとしたなら、六月の月にこそ、そのやうな、申分のない、美しい日がめぐつて來る。それはちやうど、「大空」といふ調

律師が、「地球」といふ樂器の調子がよく整つてゐるかどうかを試めさうとして、靜かに、その溫い耳を地面の上に傾けて聽いてゐるのにも似てゐる。どこを見ても、何を聽いても、私たちの耳には生命の囁きがきこえ、目には生命の輝きが映る。一つ一つの土のかたまりの中に力がひそんでゐて、それがひたすらに、伸びよう伸びようとして、光を求めて、外へよちのぼり、草や花になつて咲き出して來る—

と言つて居ります。

何も珍しいことが歌はれてゐるわけではありません。初夏の青々とした天地自然の姿を描いてゐるのですから、西洋人でも東洋人でも同じやうに感じることの出来る美しさです。けれども、そのやうにどこにも見られる季節の美しさであるだけに、氣のつかない人には何の意味もなく見過ごされてしまふものでもあるのです。

詩人ローウエルは更に初夏の氣分のすがすがしさをたたへて、

「喜びは訪づれ、悲しみは去る。それがどうしてなのか我々には分らないが——。

すべてのものが今は楽しいのだ。

草がみどり色になり、空が青く澄みわたるのと同じく、心に眞實を持つこともたやすくなる。それが自然の生活なのだ。

雲がどこへかくれてしまつたか、誰が知らうぞ？

曇りなき大空には何の影もとどめぬ。

そして、まなこは今までに流した涙を忘れ心はその悲しみといたでを忘れ去る。

季節の青春を心がわかち合うのででもあろうか――

ローウエルの美しい詩の意味だけを、普通の話し言葉に直したのですから、とてもとてもその値打を正確にはお傳へして居りませんが、ともかくも、ローウエルの作品の中でも、この六月を歌つて一年のみちしほどきだ――と言つてゐるところは有名なものであります。

潑刺とした新緑の季節は、一年の生命が一番盛んに感じられる時であることに疑ひはありません。

この明るい、すがすがしい季節には、自然の美しさに伴なつて、人の心も眞實であることが、自然に従つた行きかただと言つたローウエルの考へかたは、私たちの日常生活に一つの新しい刺戟を與へるのではないでせうか。みづみづしい六月の新緑にかこまれながら、うそをつくことは、何とうしろめたいことでありませう。

「そら恐ろしい」といふ言葉がありますが、初夏の青空の下に立つて、みにくい争ひや、だまし合ひをするのは、文字どほり「空恐ろしい」ことかも知れません。

アメリカの詩人ローウエルが初夏の季節を歌つたこの詩は、實は一つの長い詩の物語の序曲として書かれたも

のです。

それは「騎士ランフォールの幻」といふ物語の中に出て來るのです。

これはキリストの最後のばんさんにからんだ傳説の一つから材料を取つた物語で、キリストが十字架にかけられる前に、最後のばんさんを弟子たちと共になさいました時に使つたさかづきが、人から人の手に渡つてついにイギリスへ來てゐたといふ傳説がありました。その聖杯（清いさかづき）を持つてゐた人が、それを所有してゐるのにふさはしくなく、汚れた心になり、わるい行ないをしたために、聖杯が見えなくなつたのを、多くの、騎士たちがそれを探す旅に出たといふ傳説が傳はつてゐます。

歐米の多くの詩人はこの傳説を元にして詩を書いて居ります。ローウエルもやはりこれを使つて、「ランフォール」といふ騎士が、長い間見失はれてゐたキリストのさかづきを探し出さうとして旅に出るといふ物語を書きました。それが「騎士ランフォールの幻」と題された詩でその出立の時を夏の朝に取り、そして初夏をたたへる歌を、出立への序曲として書いてゐるのです。

さまざまの鳥はけふ一日が夏の歡樂のきはみでもあるかのやうに、のども破れよと聲をはりあげて歌つてゐました。そよ風にゆらぐ木の葉の中にも歌があるやうに思はれました。張り切つた夏の生命はいづこにもみなぎり渡つてそれが

鳥の歌となり、そよかぜのさゆらぎとなつてゐました。

このやうな潑刺とした風物に送られて、「我こそは長い年月見失はれてゐる由緒ある聖杯を探し出して來よう」と意氣揚々として出發した騎士ランフォールは、然しながら失望して、ある寒い冬の日に、長年の旅にやつれ果てた姿を、自分の城の前に表はしました。曾ての夏の華々しい出立の日には、城の門前にうづくまつて施しを乞うた乞食に彼は金貨を投げつけたのでした。あの時、病人の乞食は、「手に持つことの出来るものばかりが施しではない。唯義務の念からだけで考へる金貨には値打はない」とつぶやきました。

體力も財力も凡てを、むなしい探索の旅に使ひ果たして戻つて來た騎士ランフォールの目の前に再び同じ乞食がうづくまつてゐました。「おお哀れな者よ、お前もまた苦しみの道を踏んでゐるのだ」と言つて、ランフォールはたつた一きれ持つてゐた黒いパンをさいて乞食に分けてやりました。

——といふところで、騎士ランフォールの夏の夜の夢が醒めました。「愛に依つて分けるものが眞實のおくりものだ」といふ人生の一つの眞理を悟るのが、あの夏の讃歌で始められてゐるローウェルの詩物語であります。

「夏の歌と愛のおくりもの」とでも題したい一心の窓から」の今月のおたよりでございます。

信心清凉

夏の朝おきて、なみなみと手水鉢にたゞえられた水の澄むをみると、見たゞけですがすがしさを感ずる。吹くともなき微風、簾を通して陰ほのかな青畳は、素足にひやりと爽やかな感觸である。熱苦、灼熱の炎夏にも、一瞬、爽涼の境はあ

る。しかし澄水もそのまゝではぬるみ濁る、爽やかな部屋も塵はたまり、くすんでゆく。どうせは汚れ、濁るといつて、塵の中に、汚染にまかせてはいられない。日に新たならんことを求める想ひは古來、人の心奥にある。

たしかに巷は塵であり、苦熱である。人と人との烈しき往來、物と物とのたえまなき軌り、國と國との目まぐるしき接渉、——いづこにか清風爽涼の感すべきがあろうか。

阿彌陀經に「かの佛國土には微風吹いてもろもろの寶の行樹及び寶の羅網を動かすに微妙の音を出す。たとへば百千種の樂を同時に俱になすが如し。この音を聞くもの皆、自然に念佛、念法、念僧の心を生ず」とある。清風自らに吹動し、清凉自らに感ずる境は、内心秘奥の處にまたねばならぬ。それなくてはこの灼熱の世を自信をもつては歩けない。心深ければ、ものゝ眞實の深みがみえる、心浪立てば浪立つ世の相のみが迫る。信心清凉とは涅槃經の一句である、信心清凉は念佛の生活裡にある。(F)



爽やかな

夏の身だしなみ

早見君子

佛教の雑誌におしやれのお話は、ちとど
うかと思ひますが、夏の男女の身だしなみ
とも申すべき事柄の二三を、心づくまゝに
申し上げることにいたしませう。

似合はない白粉

——淡彩の美しさを——

今の婦人のお化粧について、近頃私の感
じたことは、「白粉を使つたお化粧はどなた
にも似合はなくなつた」といふ事です、白
粉を使つたと申すより、白粉の目立つ、と
云つた方が本當かと思ひますが、何が原因
でこうなつたかの詮索は暫くおいて、これ
は洋装にも和服にも若い人にも中年の人に
も云へる問題なのです。

以前はお化粧と云へば紅粉をほどこす事
であつたのでしたが現在では化粧の主なる
材料はおしろいではなく、紅であつて、そ
の紅もいかに上手に使ふかといふ事に化粧
美の生命があるわけなのです。勿論白粉も
使ふのですが、所謂白粉を塗つて顔の地色

を變へるのでなしに、基礎のクリームと自
然分泌の脂肪を押へておちつかせる使命だ
けに過ぎないのです。ですから出来上つた
顔は、潑刺として新鮮な果實の如き自然美
を發揮するわけなのです。

つまり各々の肌の持味を生かした化粧法
とでも申しませうか、ですから、かりに白
粉を目立つやうにつけた人が自然化粧の人
々の中にまぢるとすれば、たとひ美しい人
であつても造花の如き感じをまぬかれな
いのです。

然しこれは日常の場合であつて文字で云
へば草書の時です。婦人の服裝にも行書も
楷書もありますので其の服裝と出るところ
に依つてお化粧の濃淡に手加減のある事は
申すまでもありません、夏は殊に化粧のく
づれがちな季節ですから思ひきり地肌を生
かして、淡々とした生花の如き香ひ深いお
作りでありたいと思ひます。

髪もパーマネットをかけたまゝの、もや
／＼は見るからに暑くるしい、御自分で手

ためにセットして、髪に艶をもたせ、櫛の齒の見える髪かたちが、すが／＼しいと思ひます。

男性への苦言

——清涼の美しさを——

次に深く注意すべき事は、男女とも持物の清さです、何よりもまづハンカチをよく洗つて糊をつけてピンと折目を立てゝ持つ事、それから和洋を問はず襟のまわりや袖ぐちのあたり、足袋、ソックスなども清潔にしてそこから涼味を感じさせるやうにする事です。殊に男子はいつも糊のついた眼にしみるほど白いハンカチを持つてゐて頂きたい。ネヅミ色のくちや／＼したのをポケットから出し入れするのは暑さを増します。以前なら奥様が笑はれるところですが現今では寢床のあげさを云々するやうな世代ですから男子と云へどもハンカチぐらゐは洗つて下さい。ついでに爪の垢もとれと云ふものです。爪と云へば小指の爪だ

け大事にして切らない人を男子に多く見かけます。あれは中國的な古い型です。もし御趣味なら聯想の悪い趣味です、と女性の立場から抗議致します。

涼味は涼風と共に、見た目の感じから訪れます。ともかくも清らかにも申し上げます。

單衣帶の祕訣

——後姿の美しさを——

さて次には單衣帶の結びかたを申しますやせた人でもふとつた人でも單衣帶を形よく結んでゐる事はむづかしいものです。やせた人は帶をしめる前にだて巻の間にタオルをはさんで置き、その上二つ折りの後へまわつたところへ手拭ほどのものを折つてはさみ込んでから結びます。これで形よくゆく筈です。ふとつた人は手を六分四分に折つて前巾を廣いめにしてピンとやゝあつぽつたい前しんを入れ、後の折目にはやせた方よりもたつぷりした物を入れて置きま

すとタフ／＼致しません。夏はさうたいに帶の位置を下めに致しませう。襟をぬいて背中と帶の間の形をつける事によつて後姿がすつきりと致します、立つた時に帶のたれにふれて見て、たれがまくれないうの注意が必要です。夏の和服と半襟、香水、男子のゆかたについて書く豫定でしたが、おあづかりします。

淡き影

浴衣着て肩の細きがわびしかり輕きつかれを椅子によりつゝ
ビヤホールの雑踏にまじりなじまざる
我の心をかなしめるかな
目を病みしひとの眞白き目かくしを美しとみる初夏の宵
病みし友初夏湘南の家にして海の青きに心やるとふ

——ふじた・ひろし——

偶然に躓く

寺尾 讓

人生においては偶然を勘定に入れておかなければならぬ。偶然とは、究竟これ、神である。——アナトオル・フランス

しかし、竟畢神である偶然をとらえるのは必然よりも難しい。私たちはそれよりも、平凡な日常の偶然の中に安手に神を感じ、ふとした暗合の連鎖にも奇蹟を見ようとする。

雷が鳴つて梅雨があがると、カーッと、晴夏の太陽が眩しいのに、私はたゞものうい。ものを讀んでいても、何か見えていても、何時の間にか視點がずれてしまつて、ボーッとしてゆく。身體を動かすのも大儀なら、ものを考えるのも面倒だつた。空は晴れているのに心はぬかるみの中でずるずる足をひきずり、風は青く光つてそよいでも、心のしんの疲れを感じねばをられない。

それでも今日は友人との會合の日なので、家を出た。汽車にのり、省線にのりかえてゆ

く道は、考えても臆劫だつた。電車の窓ぶちに身體をもたせかけて、ガタツ、ガタリギーッという車輪の單調なひびきの中で、私は、茫となつていつた。樹々のこい緑が窓外をすぎ。チカ／＼と空の青と、樹の緑とが網膜をこすつてゆくその色の、黄色つぼくなつてゆくのを感して私は目をこすつた。トントン葺きの屋並はくすんでいたが、新しいのはツンと黄色い香がした。バラツクの木地も黄色つぼく、サーッと刷いた黄色のその上に、點々と青が、緑が、褐色がある街——黄色い街が、焼跡が、目をこすつてゆく疲れに、私はいつか目をつぶつた。

もしもし、切符を頂きます。——車掌が廻つてきた。轉轍のガタガタンとゆうゆれに車内の天井の廻轉廣告のビラがクルリとこつちを向く。「黄色い世界」とゆう文字がチクリと、目をさして、またクルツと向うに廻つた。おや、と思つて目をこする。どおかしるな、と私はけだるい身體のずれが氣になつた。

×

いつもの部屋に、友だちは數人來ていた。どつか工合がわるいんぢやないか？

部屋へ入ると、且がすぐ聲をかけた。こんなとき、いつもなら何か即座にバツと切り返

したくなるのが、私の性分だつたが、今日の私は、他人目にもそう見えるのか、とギクリとしてたゞ黙つて肯いた。

黄疽じやないか。一寸こつちを向いてみる身體がだるくないか？

Aが聞いた。たしかにだるい、今もそれで電車の中で變に茫となつてきたばかりだつたのだ、と話した。それにしても、黄疽とは考へもつかないことを言い出したものだ。

だつてAは黄疽の経験者だぜ。

Aは笑ひ乍ら私の顔をじつとみていた。目が變にボーッとしやしないか？

Aの言うことが一つ一つけだるいこゝ數日の私によく當つて来る。私はだん／＼自分が黄疽だつたのだと思ひ始めた。意外なことだつたが、そこまでは氣が附かなかつた。話は一しきり蜆汁の効くことや、部屋の天井まで黄色く染まることなどで賑わつた。私は安心して來た。身體の中のずれが、頭の中の空洞が、やつと解決ついたように落ちついてくるのだつた。

何だい、誰か病氣なのか——

遅れて來たSに、

うん、變だと思つたが、黄疽になつたよ。

と私は黄疽にどつしりと落ちついたような

言ひ方をした。やがて酒になつた。私は黄色い酒の色も氣にならなくなつた。夕方から夜へのとまどつた夏の明るさの中でボツと電燈が黄色くついた。小さい一匹の蛾が私の手の上に黄色く粉を散らせた。私は段々黄色い世界の中で酔つてゆくのを感した。

歸りの汽車は、例によつて坐る所もなかつた。肘かけに一寸尻をつゝかけて、私はポケットからさつき歸途に買った雑誌をとり出した。Tの創作が出てゐるからだつた。パラパラとめくつたところの小説の題——黄色い世界——おやと思つた。電車の廣告——じわじわと疲れが足の下から上り偶然はこゝにも忍んでゐた。小説は黄疽の話だつた。

蜆の味噌汁をのむといふんだよ——おれも昔、黄疽をやつたことがあるんだよ。——そんな文字を追つてゆくうちに、どろんとした車内の空氣の中で私はやり切れなくなつた。黄疽につかれてゐる。

x

翌日私は、懇意なO博士に診てもらいに行つた。Oさんから黄疽をはつきりと宣告して貰えばふんぎりがそこできまると思つて、内心それを期待さへしてゐた。半白の髪、白晝といった風貌のOさんはいつもの静かな面持

で、しばらくでしたね。どおかしなんですか。

と、あれこれ尋ね乍ら聴診器をとりあげた。

どおも、黄疽ぢやないかと思つて、——私はそれを強調するかのうちに、こゝ數日の調子を話した。聞いていたO氏は看護婦に何か言いつけると、私に小便をとるように言つた。白いタイル張りの便所は清潔だつた。その眞白なシーンとした冷い空氣の中で、私は昨夜の酒の濁りが、熱つぽく黄色な臭氣をにじみ出すようで、ひとりでに身體が熱くなつた。

暫く待つて呼ばれてゆくと、カルテにペンを走らせていたO氏はクルリと椅子を廻して全然、黄疽なんてありませんね。だが健全ではないですよ。ずいぶん疲れてますね。目がぼつとなるのもそれ、まだ年のせいでもないでせうからね。

と言つて笑いだした。そして言いだした。

あなたにも似合わない。友だちの暗示にかゝつたね。だがこんな考えはどう。黄疽だと言つたその友だちね、それが黄疽宗の教祖、経験したといつていろいろあなたにビタリと来るようなことを、聞かせたのは信者かな、教祖を廻る人々といったところだね。悩むあ

なたはそこで危く、この新宗教へ入ろうとした、といったような考え方は。そんなものですね。誰でも考えるところにどこかに身體のずれだけでなく、心のずれとゆうか、空虚を感じますよ。それに氣がつくことは、淋しいことかも知れませんがね。偶然がそおしたとき入りこんでゆくと、理性は傾き、信じなくなつてゆく。——逆説法かな

私はやられたと思つた。ひどく安手に偶然の神をつくりあげ、すがりついたと思つたら日頃の自分の脆くも弱いのにやり切れなくなつた。

ドアを開けて出ると、街はカーツと明るかつた。ふいと唄のように口に浮んだ言葉、「ほのほは空にのぼり、水はくだりざまになる」——法然上人の「法爾の道理」の言葉だつた。いたずらとも言えないこの一日の黄色い世界は、戦後の巷に、その妖しい花粉をまきちらしてゐると思うと、やはり「決定の信」なきものゝ淋しさが涌きあがり、眞晝の空に一筋の雲の如く翳をひいて流れていくのだつた。

*

*

*



花道

久しぶりで、花道を使う芝居を演出した。五月の東劇猿之助、井上の「宮本武蔵」である。

花道はよいものだ。

「新劇」の連中は、とかく花道を輕蔑する。新劇が、内容形式ともに、西洋近代劇の移入から初まり、西洋の劇場には、花道というものがなかつたからだ。だから「新劇の大衆化」とか、「新劇の大劇場進出」とかいつて、大きな劇場へ出たときにも、めつたに花道は使わないし、一般の商業演劇の場合にも、少し點のからい「新劇めいた」新作を新劇出身の演出家が演出する場合には、なるだけ花道の出入りを避ける傾向がある。花道を使うことが、何かしら、演劇を「卑俗化」し、藝術的な統一をそこなうような氣がするらしい。これは實にバカげたこと

佐々木孝丸

だ。花道を使つた芝居が「低級」で、花道を使わなかつた芝居が「高級」だなどという筈はないし、問題は使い方、如何にある。

花道と廻り舞台は日本の劇場に獨特のもので、日本の新劇人がこれを輕蔑している間に、外國の革新的な演劇人がこれを研究して、この形式を採り入れようとしている。

歌舞伎が花道を初めて使用したのは、寛文八年、河原崎座が出来たときであるというから、西暦では一六六八年のことで、西洋演劇史では、コルネイユ、ラシーヌなどの、フランス古典完成期に當る。

廻り舞台は、それから約一世紀後の、寶曆八年（一七五八年）に、大阪の狂言作者並木正三が發明したものと

いわれている。

歌舞伎独自の技法で、一種幻怪な感覽をそそる「せり出し」なども、やはりこの人の發明とされている。

廻り舞台が、舞台面の轉換にいかに大きな役割を演じているかは、あらためていうまでもないほどで、これなどは特に、西洋の劇場でも近來しきりに模倣している。

花道からの出は、役者にとつて、まことに晴れがましいものであるばかりでなく、歌舞伎鑑賞には、無くてならぬものの一つになつてゐる。それは「勸進帳」の辨慶や、「暫」の鎌倉權五郎や、「對面」の曾我兄弟などが、花道以外の所から登場することを想像してみただけですぐ分る。

花道は、あきらかに、能樂の「橋がかり」から變遷してきたものであるが、能役者にしても、歌舞伎役者にしても、揚げ幕のかけで出を待つてゐるときほど、緊張しきつた眞剣な表情をしているものはない。サツと揚げ幕をあげて踏み出す第一歩、また、幕のかけで云うセリフの第一聲、ともに、本舞台とびつたり呼吸が合つていなければならず、一瞬の遲速・一分のスキがあつても全體

がぶちこわされてしまふ。そうした俳優の緊張感と、その出を待つて息をひそめる觀客のわく／＼するような期待の感情とが、びつたり一致し、とけ合つて、劇場内に一つの特別な雰圍氣がかもしだされるのだ。

とにかく、花道からの登場は晴れがましい。

人の一生のうちには、花道から登場するような場面も幾度かあるであらう。私のこれまでの生涯にも、サツソウと揚げ幕をあげて出たことが二度や三度はあつたように思う。しかし、折角、人々の期待のうちに、晴れがましく花道を渡つて行きながら、本舞台での演技のつたなさ未熟さのために、人々の期待を裏切り、失敗したこともすくなくない。

花道はよいものに違いないが、やたらに使うべきものでなく、ここ一番という肝心なときにだけ使うべきものだ。(一九四九・五)

お寺まゐり

小金井喜美子

私は幼い時からお祖母様について、よくお寺におまゐりをし、お寺が大好きなのでした。其の頃は向島に住んでゐましたが、賑やかなのは堤の花の咲く前後位で、あとは静かな處です。家は小梅村で向島でも端の方、隣は畑、裏は見渡す限り田圃、周囲がそんなに淋しいのにしかも友達はなく、獨りで遊んでゐるのでしたから、「今日はお墓詣り」と聞くと大喜びです。

お寺は土手下にあり、牛の御前のお隣興福寺。舊藩主の菩提寺でもありました。郷里の津和野に代々の墓所はあつても、三百里近くも距り、交通不便の頃のこととて墓参など思ひもよらず、お國から土を取り寄せ、小さな標を立て、志す佛の日にお参りをなさる、其のお供をするのです。歸りはきつと長命寺か言問でお菓子を買ひます。それにお供へしたお下りは貰へますし、それが楽しみでもありました。その後、千住へ移つてからも、小學校へ通ふのに遠廻りでも裏のお寺の方から行ききました。お寺は大抵朝早くてもお掃除が出来てゐて、静かですから子供心にも心持がよか

つたのです。本郷に住むようになつてから近くの吉祥寺には親戚知己の墓も多く、よくお参りに行きましたが、山門から本堂迄花の咲きつづく石疊の長い道は、よい散歩道でした。震災であの大きい本堂は焼けましたが、慈眼懐かしく圓満の相好をした露佛は、久しいお馴染みなのです。

晩年、主人も暇になり、一緒に旅行をする様になつた時、私の里方森家と縁の深い、土山の常明寺へお詣りしました。草津線の三雲驛で下り、町を出離れて、松並木のきれてはつづく間から、遠い山麓迄一面の茶の花畑、其展望のすばらしさ。お寺の大銀杏と松蔭にある、祖父、母のお墓に跪いて、長く詣らなかつた思ひを果しました。立上ると低い土塀を越して鈴鹿峠や山々が、颯に霞んでつづいてゐます。

京都では知人の方が「御入洛の方を、いつも都踊へ御案内をするのですが」といはれましたが、「折角ですが、踊よりも古いお寺などを拜見したいと思ひます」と、三千院、寂光院など廻り、ケーブルで比叡山へ登り、恵心

僧都の來迎圖の自然景そのままの琵琶湖を遙々と眺めたのも一つの想ひ出です。

其頃から年々春秋には旅に出て、北海道へも九州へも行きましたが、京都と奈良とが多くそれもお寺詣りが多かつたと思ひます。京の南禪寺、黒谷など朝の散歩には殊に爽やかでした。土塀の横から門を這入ると一面の深い苔、たゞ敷石が見えるだけ、昔向島に住んだ家の庭を思ひ出したのは、苔寺で知られた西芳寺。

奈良は森の兄(陽外)が晩年、毎年いつた正倉院、泊つた博物館の官舎があるので、一入懐かしいものです。天氣のよい日は一緒に出ますが、雨の日は籠つて執筆をして居ますから、私は獨りで傘をさしてお寺を見て歩きます。土がきれいで、雨も苦になりません。雨の日のお寺まいりも、心にしみるものがあります。

主人が逝きましてからもう五年、お墓は高輪泉岳寺の後の小高い丘の上、櫻の大樹の木蔭にあつて、遠く品川の海を見晴らす處です。幼い頃からのお寺詣りもこうして今もおつゞいてきました。

(筆者は森陽外の令妹長精博士の夫人)

◇會友の聲◇

◇創刊號以來淨土誌上で御指導いたゞいてゐるものです。近來キリスト教が惠まれた狀勢下にぐんぐん教線を張つて來たためわたし達は佛教界の無力ぶりもどかしく焦慮しています。しかるに我が淨土誌の如きも毎號の表紙に、一九四九などキリスト教に同調する如き不用意さがある。日本には日本の紀元があつて吾々は生きてゐる。もし日本紀元に不明瞭がありとすれば、佛教機關誌である限り、佛誕年號をお示しになるべきではあるまいか。佛教の巍然たる態度をお示し願ひたい（三島・龍口吉之助）

◇創刊號から愛讀してゐるものゝ、最近の淨土に特に望みたいことは、淨土の特色としての念佛生活への導きである。その意味で六月號内容多彩にもかゝらず中心をはづれてゐる。尅子先生の名論をあの組み方では惜しい。（福岡・高良忍海）

——永い年月の愛讀者の方々の御批評は私たちに有難い。まことに戦後の惠まれない狀況下で、淨土はたち上るために、出来るだけ廣く讀者層をそのレンズの中におさめようと努力してきましたため、幾分中心がボヤけたように見えるのかと思ひますが、だんだんと絞りをつよめてピントを定めてゆきたいと思ひます。その意味で今月號は如何でせう。年號も、廣く世界へのつながりからで中心がずれたつもりではございません。幸ひ最近海外の同胞の方々への連りも結ばれつゝあります。どうか一層ひろく愛讀者を御紹介下さい。淨土發展のために（保から）

芝園だより

◇暑中お見舞申し上げます。

◇今年は例年よりも、暑さがきびしいとの豫報でしたが、苦熱はただ季節だけの問題ではないです。息づまるような世の動き、ひしひしと迫る何ものかの風影を感じさせられる前夜の思ひです。しかし行きづまりたくありません。均衡の破れから來る不安動搖はあつても、私たちはいつも、振子の中心軸はしつかと見定めて歩きたい。

◇苦しくとも生きゆく尊き生命の核心、吉田先生の人生の深み、眞野先生、村田さんの回想、ともにそれにふかくふれて下さる。

◇佐々木氏の舞台演出から見られた人生花道の示唆、ラジオでおなじみの村岡花子氏の心の窓から、ともに緑陰のもと、ほのかな思索に私たちをみちびかれる。お忙しい中をお書き頂けて嬉しい。

◇美容の早見君子氏は御紹介までもなく全國女性の方々によく御存

知。生活を心ゆたかにする美しさをのぞんで生きたいものです。これからも季節の美容をお寄せ下さいます。（藤田）

入會購讀御希望の方へ

會費半年金百三十八圓を、便利で安全な振替で御送金下されば、着次第御送本申し上げます。

「淨土」 八月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

昭和廿四年 七月二十日印刷
昭和廿四年 八月一日發行

（定價貳拾圓）

編輯兼 眞野正順
發行人

印刷人 春山治部左衛門

印刷所 共立社印刷所
東京都千代田區神田保町三ノ十

發行所 法然上人鑽仰會
東京都港區芝公園五ノ一〇

振替東京八二一八七番
會員番號B一〇八〇一四

會費半年金百三十八圓（送料共）

お盆の施本用とてし

半價提供

キリスト教の目ざましい進出の一因は洪水のように出る文書傳道です。
現代人は耳からよりは目から、感情によるよりは理性によつて信仰を求めます。
傳道の好機、お盆を間近にひかえ、大いに教勢擴張のために碎身して頂きたく、
各寺院の施本用として、中村氏の好著を破格の値段にておわかし致します。
部數に限りがありますから、期間中のみ特價の註文に應じます。

中村 辨康 著

法然上人とその信仰

菊半截・八〇頁

定價三十圓
特價十五圓

特 價

一部十五圓

(送料二部まで六圓、但し十部以上の場合送料は送
料は當方にて負擔、なほ代金は郵券にても可)

申込期間

八月末日 (期間後は定價に復す)

布教の彈丸!

傳道の糧食!

即時御申込み下さい

東京都港區芝公園五號地十

法然上人鑽仰會

振替東京八二一八七番